

科学者の光と闇

—— 森鷗外「魔睡」論 ——

久 永 うらら

はじめに

森鷗外「魔睡」(『昂』、一九〇九年)は、開業医として活躍する医科学者・磯貝疇が法科大学教授を務める法科学者・大川渉の妻に対して催眠術を施し、凌辱した疑いが語られる短編小説である。物語は大川を視点人物として進み、妻の告白によって磯貝の犯罪は示唆される。一柳廣孝(一九九五年)は「大川自身の性的欲望と、それにもなう彼のモノ的的女性理解を暴露していく」と指摘しており、本作の催眠術は抑圧された〈性〉を顕在化させる装置として解釈をしている。

一方、本作における催眠術は、大川と磯貝という二人の科学者にも作用する。換言すれば、本作は妻を媒介にして、磯貝が大川に対し間接的な催眠術を施したというテキスト構造を持つと言えよう。さらに、催眠術を介した、大川と磯貝という二人の科学者を表裏一体の人物として語るテキスト言説のありようは、科学者の〈光〉と〈闇〉をも浮き彫りにするのではないだろうか。

本稿は、明治期の医科学言説を通して催眠術への当時のまなざしを明らかにしつつ、本作を明治四〇年代のアカ

デミズムとオカルトのはざまを示した作品として設定することで、科学／非科学が介在するテクストに登場した二人の科学者が、催眠術と交わるとき、見えてくるものは何か、分析を試みるものである。

一・

森鷗外「魔睡」には二人の科学者が登場する。法科学者の大川は冒頭において「気のゆったりした人で、何事があっても驚くの慌てるということはない」と説明があり、普段から冷静沈着な人物として設定がなされている。友人たちが合理性を伴う職業である「行政官にして事務を捌かせて見たい」や「弁護士にして、疑獄の裁判にあの頭を用ゐさせて見たい」と評価する点からも、大川が感情に左右されることのない理性的な人物として置かれているのがわかる。

その一方で、本作におけるもう一人の科学者である磯貝は、作中の登場人物らが語る情報でしか姿を現さず、その実体は謎に包まれている。作中において初めて磯貝の話題が上がるのは、大川の友人である医科大学教授・杉村茂が、細君の所在を尋ねた際である。杉村に磯貝の印象を問われた大川は「併しあの位名声を博してゐて、開業医風に墮落してしまはずに、始終学者の態度を維持してゐるやうだから、僕は兎に角えらい男だと思つてゐる」と答え、開業医として精力的に活動しながらも学者の地位も確立した磯貝を高く評価している。しかし杉村は大川へ「磯貝へは細君丈は遣り給うな」という忠告をする。そして、その不吉な知らせが的中するかのようにように妻は次のような告白をする。

「実は先程杉村さんがお話をして入らつしやる所へ帰りまして、ふと伺ひました事が気に掛かりますのでござ

ます。それに今日は磯貝さんの御様子がまことに変わりましたので。」

「ふむ。磯貝の様子がへんだつたといふのは、どんなであつたのだ。」

妻が語るのは、磯貝の不可思議な行動と催眠状態に陥るまでの感覚である。妻の告白を受けた大川は「磯貝は実にへんな事をしたのだ。お前に魔睡術を施そうとしたのだ」と落ち着いた口調で言い聞かせ、磯貝が妻に施したものを催眠術であると推定する。さらに、一柳は大川が性的な想像を働かせる背景に、彼自身が抑圧した「性的欲望」と「モノ的女性理解」が存在すると指摘した上で、それらが表出する発端を次のように述べている。

その結果、近代的知性にとって抑圧の対象とされていた「性」の位置と、抑圧されている「性」への眼差しを暴露してやまない催眠術への嫌悪感というコードのなかに、催眠術紹介のコードは吸収されてしまうのである。

本作において、催眠術は日本近代知識人が制すべき「性欲」を顕在化させる装置として機能している。性欲に対して「頗る恬澹」である大川は、妻の告白を機に「鶉色の長襦袢を脱いで、余所行の白縮緬の腰巻を取るなど想像する。そして、細君の白い肌を想像」し、無意識に妻が着物を脱衣していく様子を思い浮かべてしまう。自身の想像に対し「不愉快」を覚え「一寸顔を擧め」ているのは、自己の欲望と理性の間で葛藤する様子を表すためであると考えられる。また、一柳は次のような指摘もしている。

大川の妄想は、磯貝によって喚起される。磯貝は、自らの想像を催眠術によって他者化する。このときの催眠

術は、すでに単なる技術ではない。それは、彼の欲望を喚起するなにものである。そして彼らは、女性をモノとして把握する眼差しを共有する。「魔睡」のなかの催眠術は、男性性に内在する暴力的な抑圧を拡大し、戯画化して、読者の前に示しているのだ。

つまり、一柳は「性欲」という大川と磯貝の共通点から、二人を「同一の存在」と見なしていると言える。まさに、催眠術によって大川と磯貝は視覚の共有が行われていると考えられるのではないだろうか。大川の脳裏に出現した磯貝の目は「爛々としてかがや」いており、その視線は妻が見たものを追体験していると読めよう。さらに、妻から磯貝の様子を聞き出す大川の目が「次第にかがやいて来」るのも、その理由の一つとして考えられる。

しかし、一柳が指摘するように、確かに二人が妻に向ける性的なまなざしは「同一」のものだが、大川の内面が顕わになる契機として、磯貝によって催眠術を施された妻からの告白であったことは見逃せない。すなわち、磯貝の催眠術が、妻を媒介にして大川にも施される、というテクスト構造が見えるのではあるまいか。催眠状態から覚醒した妻が「少し頭痛が致しました」と訴え、そして、間接的な催眠術を施されたであろう大川もまた、汽車の車内で「午後から常にならない感動を受けた頭に疲労を感じ」ている。類似する二人の症状からは、磯貝による催眠術の成功がうかがえるわけだ。

さらに、本作の二人の科学者がどちらも催眠術に興味を示していたという共通点も見逃すことはできない。本稿は特に、大川と磯貝という二人の科学者が催眠術に関心がある点に着目するとともに、本作に描かれる催眠術の二面性が作品に及ぼす影響について考察を試みる。

作品発表当時、催眠術には忌避と好奇という二つのまなざしが向けられていた。次章では明治四〇年代の催眠術

言説を確認した上で、大川が催眠術に向ける関心とオカルト的なものへの興味を明らかにしつつ、作中における催眠術の描かれ方について分析を行う。

二.

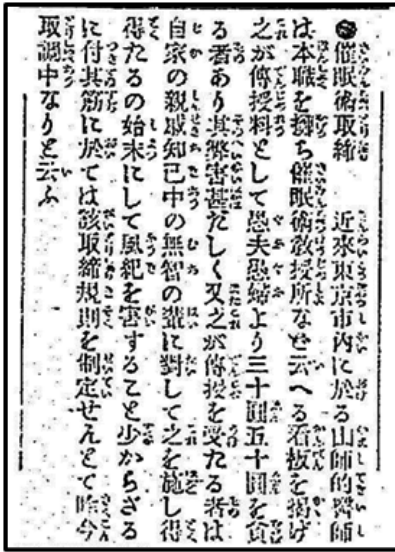
明治日本に「催眠術」が輸入されたのは明治二〇年代まで遡る。ヨーロッパの最新の学術として日本に伝来した「催眠術」は、馬嶋東伯が患者の診察に催眠術療法を取り入れた一八八五年頃を境に、雑誌および新聞記事等のメディアにおいて散見されるようになる。例えば、一八八六年には『東洋学芸雑誌』五月号の雑報欄では、催眠術の英訳「メスメリズム」と「ヒプノティズム」の二つの用語を紹介した上で、日本における催眠術の流行の広がりを伝えている。次いで一八八七年には、後に東京帝国大学の医科大学教授となる大沢謙二がヨーロッパにおける催眠術の歴史および学術成果をまとめた単行本『魔睡術』（大沢謙二、一八八七年）を自費で出版した。『魔睡術』は、大沢が医学の学術雑誌『中外医事新報』の第一五一号から一六二号にかけて連載した論考を編纂した単行本である。その冒頭では、原理およびイメージに差異があらながらも、ともに「催眠術」と訳される「メスメリズム」と「ヒプノティズム」について触れ、大沢は両者の区別を目的として次のような定義をしている。

動物磁石及「メスメリズムス」なる語の由来は上に述ぶるが如しと雖も方今は之を「ヒプノチズムス」と称す。

「ヒプノス」は希臘語催眠の義なるが故に睡眠術と訳するを適當とす。然るに今此に魔睡術の名を附せしは単

党尋常の睡眠と区別するが為なり。^三

大沢が「メスマリズム」と「ヒプノティズム」の訳語を区別した背景には、イギリスの医師ジェイムズ・ブレイド (James Braid) が動物磁気を否定したことに起因すると考えられる。十八世紀末にメスマーが「メスマリズム」を発案したことで催眠術を用いた治療法が誕生した。十九世紀半ばには、ブレイドが「メスマリズム」の原理は、動物磁気ではなく被験者の心理的な作用で催眠状態が起こると指摘し、さらにオカルト色の強い「メスマリズム」との区別を目的として一八四三年に医学用語「ヒプノティズム」を提唱した。一八七〇年にドイツ留学を体験した大沢が、自身の論考において「魔睡術」という訳をつけた背景には同一視されがちな「メスマリズム」と「ヒプノティズム」、この二つの語が持つ意味が異なることを認識していたからと考えられよう。事実、医学領域では催眠術を医療行為として区別する動きがうかがえ、大沢が「ヒプノティズム」の魔睡術と訳した後年には森鷗外が『審



図一. 1903年5月5日『朝日新聞』記事

美網領』(春陽堂、一八九九年)にて「Hypnosis」を「魔睡」と訳した用例を確認できる。

本作のタイトルの発露には医学用語ヒプノティズムが関係したと考えられる一方で、本作が発表された明治四〇年代における催眠術にむけられたまなざしは厳しいものであった。日露戦争を契機に催眠術関連の書籍が多数出版される^四なかで催眠術がはらむ問題の表面化は進み、科学的な分析対象として位置していた催眠術は学術の表舞台から徐々に姿を消し始める。

催眠術がはらむ問題について言及した『朝日新聞』の

第四、之を禁ずるには医療と云うことの定義を定むるのが必要である

第五、医師と雖ども殊に之を学ばざれば行うことが出来ぬ

第六、医師は之を学ぶべきものである。それでなければ非医々者の跋扈を防ぐことが出来ない

第七、此術の俗人間に流行するのを防ぐには公衆の前に興行することを禁すべきである

第八、此術は放火、放蕩、盜賊、偽証、証券偽造、猥褻等種々なる犯罪の目的に供することが出来る

第九、魔睡間の行為は精神障害の爲であるから無罪であるが、術者は犯罪として罰すべきものであろう

第十、魔睡時の言は法律上無効証ではあらうが参考となすべき場合がある

第十一、醒覚時の教唆は法律家も医師も特別注意すべきものである。^五

大沢が挙げた十一項目では主に催眠術の取り扱いが言及されている。中でも、特に第三項から第六項では医師が催眠術を正しく学ぶことを推奨している。その背景には、非医師による催眠術の悪用が横行したことで起きる「不測の害」を防ぐべく、催眠術を学んだ正規の医師が治療行為として適切に使用することを唱えていると言えよう。催眠術を悪用した犯罪の表面化と、医科学領域からの催眠術を取り締まろうとする動きによつて、一九〇八年には「警察犯処罰令」の第二条十九項において「十濫ニ催眠術ヲ施シタル者」を「三十日未満ノ拘留又ハ二十円未満ノ科料ニ処ス」という催眠術の規制を目的とした法律が制定された。一九〇八年の催眠術の法規制を皮切りに、見世物興行における催眠術は嚴重な取り締まりの対象となり、またさらに民間向けの私立病院およびアカデミズムの学者たちが、のきなみ「催眠術」というワードを避け出すことは、催眠術に対するまなざしをより一層厳しくさせた。

「魔睡」には、催眠術を忌避する姿勢も如実に描かれている。次は妻が夫である大川に磯貝の催眠術の疑惑を打

ち明けた場面である。

博士は重々しい調子で、徐かにこう云つた。

「うむ。それはお前が心配したのも無理はない。お前は危険な目に逢つたのだ。お前は常の体ではないから、こんな事を言つて聞かせてはどうかとも思ふが、おれが曖昧な事を言つては、却てお前の心配を増すやうなものだから、言つて聞かせる。磯貝は実にへんな事をしたのだ。お前に魔睡術を施さうとしたのだ。」

「あの魔睡術を。」

こう云つた細君の目には、見る見るまた涙が湧いて来る。細君は袂からハンカチーフを出して、目を拭きながら、詞を続けた。詞は苦しそうにきれぎれに出る。

「あの、それではもしや、(問、) 体をどうか致されたのではございますまいか。」^六

催眠術を施された疑いを夫から指摘され「あの魔睡術を」と語る妻の反応は、「あの」という指示表現から察せられるように、当時の催眠術に対するマイナスイメージを写し出している。またその後にく「それではもしや、(問、) 体をどうか致されたのではございますまいか」という妻の台詞からも、当時の読者層が広く共有した催眠術に対する忌避のイメージが見て取れると言えよう。

こうした催眠術に対する忌避のまなざしがある一方で、法規制以後も催眠術関連の書籍は出版され続けている。鷗外とも関係の深い渋江易軒は『自己催眠術自在…原理応用』(大学館、一九〇九年)の冒頭において「先ず催眠状態とは何か?暗示とは何か?を明らかにせざるべからず」と掲げ、催眠術が心理にもたらす効果と取り扱い、催

眠術が有用となるケースなど、細かく論じている。次に引用するのは、易軒の『自己催眠術自在…原理応用』において紹介された被術者が術師の思うままに操られた様子である。

(第四) 施術者が右手を被術者の額部に推当て、徐々と極温和に摩擦すると、被術者は次第に眠始める。施術者は篤と其様子を見澄まし、敲いて居たのを止めて、

『あなたは、猫だ。』

と言うと、被術者は直ぐに四這になって、

『ニャーニャー。』

『イイヤ、猫ではなかった。椅子だった。』

被術者は、忽ち四這のままズツと背を掛けて、椅子然と抱込む、其の時又

『此の椅子は、脚が一本取れたので、兎角一方へ傾斜いでならん。』

と言ふと、被術者は直ぐ片手を枉げて其の方へガクリとなる。

『ヤア、あなたは、鶏だ』

と言ふと、忽ち両手だけを突いて、『ココココ』と鳴き『東天紅』と鳴く。^七

催眠術をかけられた被術者は、術師によって「猫」や「イス」「鶏」など様々な姿になるよう命じられ、その命令通りに動いてしまう滑稽な姿が見られる。易軒は、催眠術を相手に暗示を施すことで他人の行動や考え方までも自分の意のままにコントロールできる術として紹介している。本書は心を操作することで、薬の効果の増長、自己

催眠による記憶力の養成、さらには、放蕩や賭博などの悪癖を矯正するなど催眠術の可能性に期待した内容が展開されている。「魔睡」は、このような催眠術への好奇のまなざしもはらんでいると言える。次は、妻が病院での磯貝の様子を語る場面である。

「ふむ。それからどうした。」

博士の目は次第にかがやいて来た。

「それにあの方はわたくしの手をさすりながら、わたくしの顔をじいつと見て入らっしゃる。あの方の目を別段変つた目だとは、これ迄思つたことはございませんでしたが、今日に限つて何だか非道く光つて恐ろしい目のやうに存ぜられましたのでございます。それでその目を見ないように致そうと存じましても、どうしても見ずにはゐられないやうな心持が致すのでございます。」

「ふむ。それからどうした。」

「そう致していますうちに、少しの間気が遠くなるやうな心持が致しましたが、その時の事は跡から考えて見ましても、どうもはつきり致してないのでございます。」

「そうか。その跡はどうだった。」^八

磯貝に肩から下へと何遍も身体を撫でられ、じつと目を見つめられた妻は、その動作に嫌な感じがしつつも、なぜか磯貝の目を逸らすことができないう不思議な感覚に陥つたことを語る。さらに、妻への語りに対する大川の相槌は、姿勢は催眠術への強い関心としても解釈できよう。

大川の世間的な立場は、法科大学教授であり民法学者である。しかしながらアカデミズム側に位置する大川が、オカルトの象徴である催眠術に興味を示すのはなぜなのか。それは、彼が幼少期からこつくりさんなどのオカルト的なものに関心を寄せていたという背景に起因する。次の引用は大川自身が催眠術に詳しい理由を語る場面である。

今日の午後の面白くない出来事が頭に浮ぶ。博士は色々な書物を読んだ中に、不幸にして魔睡術の事を少し詳しく読んでみたのである。それには因縁がある。博士が子供の時、東京でこつくりさんといふものが流行つた。それから洋行してゐると、欧羅巴で机叩といふことが流行つた。こつくりさんの不思議が先から気になつてゐたので、それに似寄つた机叩の解釈を求めようと思つて、Spiritismusの本を覗いて見た。それから魔睡術の本を見ることになつたのである。^九

こつくりさんの原理を探求しようと心霊学の書籍に接触した大川は、結果的に催眠術と遭遇することとなる。大川のおカルト的なものへの関心は、先にも取り上げた磯貝による間接的な催眠術を施される隙を与えてしまった要因とも言えよう。

ここまで明治四〇年代における催眠術にむけられた忌避と好奇のまなざしを、当時の言説から概観しつつ、催眠術をめぐるコンテキストを利用した本作がオカルト的なものに魅せられた科学者の姿を描いていることを確認した。

ところで、本作の黒幕であり大川夫妻に催眠術を施した磯貝という人物はいったい何者なのか。次章では、法科

学者・大川が磯貝に裁きを下さずその行為を黙認^{一〇}した背景として、催眠術の使い手が医師であるという設定がテクストに及ぼす影響を紐解いていこう。

三.

本作の黒幕的存在である医学博士・磯貝瞻は登場人物らの会話でのみ、その人物像を追うことができる。磯貝は神経病専門の開業医でありながら医科学領域で学者として活躍もしつつ、「此間も僕の方の専門の本を見ていると、Zurechnungsfähigkeitの論の中に、あの男の説が引いてあったっけ。」という大川の台詞から察するに、法科学領域と精神病学の境に属する刑事責任能力の有無に關した論考にも彼の名が見られるなど、幅広いアカデミズムの分野に精通したジェネラリストと言えよう。大川や杉村もその優秀さを賞賛していることは先にも触れたが、彼らの大きな違いは磯貝が開業医と学者を兼任していることではないだろうか。また大川と同様にドイツ留学経験を持つという設定は、磯貝の異様さをより一層際立たせる。

「君は磯貝と交際してゐるか。」

「うむ。別に交際してゐるといふでもない。お互に伯林を立とうと思つてゐる真際に、あの男は着いたので、一寸逢つた切だつたらう。それからErbとかいふ教授の処へ往くといふので、あの男はすぐにHeidelbergへ往つてしまつた。」^{一一}

大川らよりも後にベルリンに到着した磯貝は、エルプ (Erb, Wilhelm Heinrich) という教授に接触するためにハ

Erh.	エルプ筋萎縮 (内)
	進行性筋萎縮ノ一症ニシテ肩胛ノ周圍ヨリ始マルモノ
Erh.	エルプ麻痺 (内)
	上腕神経叢ノ壓迫ヨリ來ル三稜筋、二頭筋、上腕内筋、廻後長筋、棘下筋及ヒ橈骨神経ノ部位ニ發スル麻痺
Erh.	エルプ點 (内)
	上腕ヲ高举シ且後方ニ向クルモハ鎖骨ト脊柱トノ間ニ上腕神經叢ノ一點ヲ現ハス若シ此點ニ強力ノ壓迫ヲ蒙ルモハ肩胛上腕及ヒ橈骨神経ノ部位ニ麻痺ヲ發ス又此點ニ電氣ヲ通スルハ肩胛筋、二頭筋、廻後長筋ニ作用ヲ波及ス
Erh-Charcot.	エルプ、シャルコー病 痙攣性脊髓勞 (内)

図三. 『人名医語字典』、牧野出版、1894年

四

で有名なシャルコーの名前が確認できるのは興味深い(図三)。

エルプがハイデルベルク大学へ移る頃は、日本において鷗外が陸軍省軍医副に就任し、衛生学修学およびドイツの衛生制度の調査を目的としてドイツ留学を命じられた時期でもある。一八八四年から一八八八年にかけて留學生として過ごした鷗外は、はじめドイツ・ベルリンに入国したのち、ライプツィヒやドレスデン、ミュンヘンなど様々な都市を渡り歩いたのは言うまでもない。そして、鷗外の留学期と並行するかのようには、当時のヨーロッパでは催眠術の原理に関して二つの学説の対立および論争が繰り返されていた。催眠術の原理に対しヒステリー説を提唱したのは、シャルコー(Charcot, Jean Martin)が率いるサルペトリエール派であり、対立するもう一方は、暗示説を唱えたりエポー(Liebeault, Ambroise Auguste)らが属するナンシー学派である。論争の末、暗示説を提唱

イデルベルグへ向かったらしい。エルプは神経病学を専門としたドイツの医師であり、末梢神経麻痺に電気療法を実践した上に、上腕神経叢の「エルプ点」や出産時の上部腕神経叢麻痺「エルプ麻痺」などを発見している。また、一八八〇年にライプツィヒ大学の神経学外来教授として勤めた後、一八八三年からはハイデルベルク大学の教授に就任した経歴を持つ。日本では、エルプの医学用語が一八九四年刊行の三宅秀編『人名医語字典』(英蘭堂、一八九四年)において早くも紹介されており、また、その中でヒステリー研究

したナンシー学派に帰結する。しかし、精神病学・神経病学・心理学などの各専門家が論争を繰り広げたことは、結果として催眠術研究を飛躍的に伸ばすことに繋がった。さらに、催眠術をめぐる研究が進められていく、そのありさまを留学中の鷗外も肌で感じていたに違いないだろう。

また、金子準二ほか編『日本精神医学年表』（牧野出版、一九八二年）を確認すると、一八八六年に東京帝国大学医科大學課程の改正が入り、ようやく精神科・精神病学が新たに独立する。その動向は催眠術を内包する精神病学が日本において〈医学〉として確立することを表すと言える。日本において催眠術の輸入・流行および精神病学が〈医学〉として確立するのは、両者ともに鷗外が帰国した後の出来事である。鷗外は日本とヨーロッパ、双方の〈医学〉を目撃した。ドイツへと渡航した鷗外は、日本よりもあらゆる面ではるかに進歩しているヨーロッパに衝撃を受けた。中でも、当時、論争が熱く繰り広げられていた催眠術は、彼にとって最新の賢智であり、興味を引く対象であったに違いない。

「魔睡」のテクスト言説は、鷗外の留学時期の経験が下敷きにされている。先にも確認したエルプが一八八三年にハイデルベルグ大学に就任したことを踏まえれば、それ以降に磯貝は入国したと推測でき、その時期は鷗外の留学とも重なる。すなわち、磯貝も鷗外と同様にヨーロッパにおいて催眠術研究が飛躍的に進められていく様を目の当たりにしたと考えられよう。

鷗外の帰国後、明治二〇年代には日本にも遂に、催眠術がヨーロッパの最新の学術的成果として輸入され、その盛り上がりからは催眠術の流行の兆しをうかがえる。例えば、馬嶋東伯の催眠術治療に遭遇した近藤嘉三は『心理应用魔術と催眠術』（穎才新誌社、一八九二年）を出版し、催眠術の定義付けを試みている。近藤は馬嶋の患者たちが催眠術治療によって回復していく様子に出くわしたことを皮切りに、患者が回復していく要因の分析に挑んだ

が、結果的には理由を説明できなかった。このような近藤による催眠術の研究は、明治二〇年代の催眠術の立場を明白に表している。それは、催眠術が科学的な分析対象でありながら、神秘的な術として科学では説明できないという、アカデミズムとオカルトのはざまに位置していたことである。その後、明治三〇年代には、人々が催眠術に向ける飽くなき好奇心がもたらした関連書籍の出版ラッシュと、その雰囲気にも吞まれるかのように催眠術を悪用した事件が生じ、催眠術を排斥しようとする動きも見られる。催眠術に対する好奇と忌避のまなざしについては前述したが、こうして催眠術はアカデミズム領域から徐々に姿を消していき、オカルトの象徴へと移行していく。このように時代背景を概観していくと、「魔睡」の物語世界は鷗外の経験とびつたりと重なり合うのだ。

さて、ここまで「魔睡」発表当時の時代背景を追ったことで、本作が日本における催眠術の受容および流行のプロセスを経て、忌避と好奇のまなざしが混在する同時代の催眠術言説をもとに物語が展開している作品であることを確認してきた。では、ドイツ留学の体験を通して最新の科学を日本に持ち帰った医科学者・磯貝は、本作において如何なる設定がなされているのか、同時代の医科学領域における医師のヒエラルキーおよび法科学のポジションを本作のテクスト言説と絡めつつ、考察を試みる。

磯貝が開業医と学者のはざまに在ることは先にも確認した。しかしながら、ここで再び注目したいのは、大川が学者の立場から磯貝を見たときに発する「開業医風に墮落してしまわずに」という台詞である。学者でありながら開業医に従事する磯貝は、当時の医学界ヒエラルキーにおいてどこに属していたのだろうか。

最新の医科学を求めてドイツに赴いた磯貝は、鷗外が卒業した東京医学校と同程度の学歴を持つことは容易に想像される。当時の医療制度において、医師と呼ばれる人物は、一八六八年に医師の開業に免許を必要とする東京府が発令されたことや、一八七三年に医師開業試験が始まることなどが示すように、医師になるためには大学

卒業後に試験を通過する必要があった。そして、晴れて免許を有した医師は、公立病院勤務に進む者や、大学卒業後に自ら病院を開業した者も見られる。幕末から明治にかけての日本の医療制度について論じた青柳精一は、明治期の病院の特徴について「明治一五年ごろから開業医は洋方・漢方問わず、国民大衆の中に存在感を掲示するようになった。その代表的な事例が私立病院が年ごとにふえつづけたことである」¹²³と述べ、病院という施設のありようが年を追うごとに変化してきたことを指摘している。明治一五年という時代は、鷗外が大学を卒業し、開業届けを提出した一八八一年と間近であり、磯貝もまた私立病院が増え始めた頃に開業した人物であると考えられよう。

磯貝が大学卒業と同時に開業医の道を選んだことを確認したところで、一柳は明治日本の医学界ヒエラルキーにおける精神科医の地位について次のように述べている。

ただし明治三十五年ごろまでは、医師を志す者のほとんどは内科外科を希望しており、精神科をめざす者はほとんどいなかったらしい。東京帝国大学出身者で内科か外科を選べば、高い社会的地位と高収入は約束されたようなものであるのに、それを棒にふるのは変人、というわけだ。明治三十五年の卒業生で精神科医を希望したのは、のちに森田療法で知られた森田正馬ただ一人である。その森田もまた、父から激しく反対されたという。(中略)ただし精神病院の設立は明治二十年代にはわずか二院にとどまる。ところが、三十年代になると九院が設立される。うち、二病院は、公立。それまでの公立精神病院は、巢鴨のみだった。この時期に精神病学は、「国家」によって必要な「学」のなかに位置づけられていったと考えられるだろう。なお、陸軍医学学校で精神科の講習が開始されたのは、明治三十九年。海軍医学学校は同四十四年である。このような精神医学の飛

躍的な発展は、精神科医が司法精神鑑定に関与するベースが整備されていたことと、深く関わってゐる。」三

磯貝がヨーロッパの最新の医学を学ぶために留学したことは、専門知識を多く有していたこと示すとともに、彼が同業者である杉村と同等の階級に属した医師であることを意味する。要するに、医学界ヒエラルキーの高い地位にありながら、「高い社会的地位と高収入」が約束された内科・外科を選択しなかつた磯貝は「変人」であつたに違いないだろう。ところが、一八八六年に東京帝国大学が精神科・精神病学を新設したことで、制度としての精神医学の〈医学〉カテゴリ化、そして、それからおよそ二〇年後の一九〇二年頃から散見される「精神病学は、「国家」によつて必要な「学」のなかに位置づけ」というのも、精神病学が医学の権威として確立したことを象徴する出来事と言える。また、磯貝が専門とした〈医学〉は神経病学であることはテキストが語っている。

「小石川の母が工合が悪いので、磯貝の処へ見て貰いに往くのを、連れて行つたのだ。電話で一しよに行つてくれろと云つてよこした時に、僕が立つことを妻が話した物だから、そんなら独りで行くと云つたそうさ。僕が立つのに妻なんぞはいなくても好いから、是非一しよに行つて上げると云つて、妻を附けて遣つた。それでおもうかれこれ帰る頃だよ。」

細君の里は実業界で名高い家で、小石川には大きい別邸がある。主人の外姑はそこに住んでゐるのである。

「どんな病氣なのだ。」

「なあに。いつも君に見て貰ふ時の容態と大した違いはないやうだけれど、誰かが神経系病専門が好いとか何とか云つたので、磯貝へ往くことになつたださうだ。」

「やうか。一体 Kimakerium であんな風なのは、初から神経系病の方へ持つて行くのが好かつたのだ。」^{一四}

磯貝が神経病学を専門としていながら、自身の専門外にも知見を有しており、その一つに精神病学にも精通していたことは先にも確認した。つまり、磯貝は、学者として成功する道を獲得していながらも、開業医にドロップアウトした人物である上に、精神病学への注目および需要が向上する時勢において、一早く〈精神〉の部分に関心を示した先駆者的存在であったと考えられまいか。すなわち、当時の地位としては下位に属した開業医・磯貝は、アカデミズム領域の知識人としてのポストも得た科学者の〈光〉の側面を有した人物なのである。

ところが、物語は磯貝がどうやら催眠術を悪用して犯行に及ぶという疑惑が示唆される展開を迎える。

杉村博士の目はアイロニーの影が閃く。

「僕のやうにごつごつしてゐるよりは、医者として適してゐるかも知れない。君にも余り sympathisch ではないらしいなあ。」

「sympathisch ぢもなすが antipathisch でもない。兎に角、学者として尊敬してゐる。」

「それは僕も異議なしだ。併し。」客は少し言ひ淀んだ。「しかし、僕は同業者の批評をするのは好まないが、君と僕との間だから云つて置きたいのだ。磯貝へは細君丈は遣り給ふな。」

「ふむ。」

主人は驚いて客の顔を見ている。客も暫く黙つて烟草を飲んでゐる。次の間で何かこと音がするようであったが、すぐに止んでしまった。客。

「君はまだ用がったのではないか。つい長居をして、人の蔭事まで言ってしまった。」

「もう荷物が出来たから、車が来るまで用はない。君は猥に人の事をいう人ではないから、僕もこれからは注意することしよう。」

「なに。奥さんはしつかりしているし、おつかさんと一しよで、自分が患者でないのだから、大丈夫だが。」

「しかし世の中を割って行くには、防がれる事は防がなくてはならないからなあ。」

「うむ。それだから余計な事かも知れないが言ったのだ。」^{一五}

そして、杉村の忠告は、妻の告白によって現実性を帯びてしまう。つまり、この黒い噂が照射したのは、診察室という密室で催眠術を悪用して自身の性欲を満たそうとする磯貝の〈闇〉の側面である。

では、本作のもう一人の科学者である法科学者・大川の〈光〉と〈闇〉の側面はどのように描かれているのか、言及していこう。まず、大川の〈光〉の側面は、周囲の人々から厚い信頼を集め、如何なる場面においても快刀乱麻に解決してしまう点に見られる。大川が信頼を置かれた人物であることは、かつて民法研究のためドイツへ留学するよう命じられた点や、次の出張の理由が「関西の或大会社でむづかしい事件が起つて、政府の方から内意も受けて、民法に詳しい博士が、特に実地に就いて調査する為めに、表向は休暇貰つて出掛ける」^{一六}といった点から、読み取ることができよう。このようにエリートクラスに属する大川は、物語の冒頭で理性的な人物として紹介されたが、妻の告白を契機に嫌な想像が働いて狼狽する様子が描かれている。

しかし、妻から磯貝によって凌辱された疑いを聞かされた大川は、法学の専門家であり、さらには、同時代には催眠術使用に対して裁きを下す法律がありながらも、磯貝の疑惑を外に漏らさぬよう黙認するという判断を下して

いる。大川が黙認という判断を選ばざるを得ないのには次のような言い分が関わる。

魔睡術は確かに細君の身に功を奏したに違ない。功を奏したとすれば、細君の魔睡に陥いつた間に磯貝は何をしたか。細君には格別な事はなかつたのだらうと云つた。併し此の断定には何の根拠も無い。磯貝は魔睡の間に奈何なる事をもサジエストすることを得たのである。そして細君は、自分が魔睡の間にサジエストせられて爲た事を、魔睡から醒めてからは覚えてゐる筈が無いのである。此の魔睡の間の出来事は奈何なる程度まで及んだのであらうか。磯貝は爲し得る事を爲したのかも知れない。少くもそれがボツシブルである。博士は細君の話を聞いた時に、推理上ここまで考へざることを得なかつたのである。^{二七}

大川が聞いた妻の告白には不明瞭な点も多くあり、故に磯貝の黒い噂が流れていようとも、彼を犯罪者だと断定する証拠は闇の中に隠されているのだ。すなわち、妻が催眠術を施され、凌辱されたか否かを判別する術はないのである。

さらには、大川が磯貝を裁けない理由の一つに、催眠術を扱う人物が医師であるという点が関係してくる。次の引用は、呉秀三が「催眠術の治療上の価値」(『催眠術及ズッケスチオン』、南江堂、一九〇四年)と題して、病气や怪我に対して治療目的で催眠術を用いた場合の効果を発表した論考である。

催眠術と云ふものは医者が用いられなければならぬものであるし、又誰がやってもどんな医者でも之を治療上に応用することが出来ると云うものでありませぬ。心理学に通じて催眠術に経験があつて催眠状態は勿論其方法

をよく知って神経病理及精神病理を知った医者でなければなりません。^{一八}

どのような病気や障害に催眠術が効果的に作用するのか説いた論考だが、ここで注目したいのは、「催眠術と云ふものは医者がいらなければならぬ」という呉の主張である。一九〇八年に法規制される以前から催眠術を危険視するまなざしは存在していたが、その一方で医師による催眠術は推奨されていた事実がある。それは前述した大沢も同様のことを唱えていた。さらに呉は、医師であれば誰でも催眠術が応用可能というわけではなく、催眠術に見識のある心理学および精神病、神経病に詳しい医師でなければならぬと主張する。確かに「催眠術の治療上の価値」が取り上げた催眠療法が有用とされた病名の中には、強迫観念・躁鬱という精神病学および心理学カテゴリーに属する病名が挙げられる一方で、特に神経衰弱・舞踏病・吃音などの神経病に分類されるものに対しても、催眠術が最も有効であると提唱している。

ここから、神経病専門の医師である磯貝が施した催眠術と思しき行為が、治療目的なのか、将又犯罪目的なのか断定する方法がなく、この当時医師による催眠術は曖昧で不確かな位置に介在していたことが分かる。さらに、磯貝による催眠術は密室空間で行われてしまった。こうした催眠術をめぐる複雑な状況が混ざり合うことは、黙認するという判断を下した大川の心理にも繋がるとともに、催眠術の曖昧な立場が法科学の弱点を暴露したと考えられるのではあるまいか。斯くして法の通用しない人物を前にしたとき、大川は磯貝に対して次のような心理を抱く。

実は博士は矢張因襲に囚われてゐるのかも知れない。兎に角博士は、細君の魔睡に陥つた間のポッシビリチイを考へて、何とも言えぬ不快を覚えたのである。さてここに妙な事がある。それはいつも博士が人に迫害を被

つた時の反応の為方なのである。博士はかくまで不快を感じながら、磯貝を憎むという念は殆ど起こらなかつたのである。博士の心ではこういう時に、いつも卑む念が強く起こつて、憎む念に打勝つのである。卑んで見れば、憎む価値がなくなるのである。^{一九}

磯貝が法で裁くことのできない相手だとしても、自身の妻が性犯罪の被害者であるのに変わりはない。しかしながら、そうした事実を受けて大川は「不快」を覚えながらも、怒りを露わにすることもなく、「磯貝を憎むという念は殆ど起こらないで、仇敵とも呼ぶべき相手に対して「卑む」ことで落ち着いてしまう。つまるところ、大川が抱く磯貝への心理は、自身とよく似た表裏一体の科学者である磯貝の〈闇〉の側面に接触したとき、大川自身もまた内に秘めた自己の〈闇〉の部分で自覚した心理として読み取れるのではないだろうか。

本作は、妻を介して施された間接的な催眠術によって、磯貝と大川という二人の科学者の視覚共有を皮切りに、大川の内なる深層心理が暴かれる物語展開を持つ。しかしながら、大川が興味を抱くのは、容疑者である磯貝を法に則って裁くことよりも、催眠術やこっくりさんなどのオカルト的なものである。すなわち、大川の〈闇〉の側面とは、催眠術を悪用した事件を意識しながらも、その催眠術に対する飽くなき好奇心であったのだ。本作は、大川という法科学者の内面を通して、自己の〈光〉と〈闇〉の間で葛藤する近代知識人の姿が描かれているのである。

おわりに

「魔睡」発表当時の催眠術に対するまなざしは二面性があった。それは、医学領域が唱えた催眠術を危険視して取り締まろうとする忌避の態度と、他者の内面を暴き、自己の意のままに相手を操作することのできる不可思議

な術に対する人々の好奇心である。本作に描かれた催眠術は、磯貝の医科学に携わる者としての光と闇を照射するとともに、法科学者としての大川の光と闇をも浮き彫りにした。

アカデミズムとオカルトのはざまに位置する催眠術は、法規制に縛られながらも、精神病学・神経病学などの治療に対しては、医科学領域から有効であると唱えられていた。しかしながら、診察室という密室で行われたその行為に、治療目的なのか、性犯罪に及んでいるのか、白黒をつけることは困難であり、本作は催眠術を利用することで、曖昧な医科学のありようを描いている。

また、こうした状況に直面した大川が、妻に病院での出来事を黙認するように釘を刺し、容疑者である磯貝を無罪放免にしてしまうという展開は、事実・証拠がなければ法はただ無力であるという、法科学の弱点を顕わにしたと考えられまいか。鷗外は、「魔睡」を通して明治四〇年代における催眠術がはらむ問題を物語に昇華することで、二人の科学者の光と闇の側面を描き出そうと試みたと解釈できる。その試みは、物語の主題を催眠術の危険性に着目したように見せかけて、法科学と医科学が抱えるグレーゾーンを訴えたとも読めるのではないだろうか。

註

- 一 森鷗外『鷗外全集』三巻、岩波書店、一九七二年、六〇二頁
- 二 『鷗外全集』三巻、六〇七―六〇八頁
- 三 大沢謙二『魔睡術』、大沢謙二、一八八七年、四頁
- 四 国立国会図書館提供の検索エンジン「NDL Ngram Viewer」を用いて、一八八一年から一九一〇年までの出版物を対象に各年代ごとの「催眠術」の単語の出現頻度の調査を試みた。「催眠術」の語の初出は、一八八一年刊

行の和田垣謙三ほか編『哲学字彙・附・清国音符』（東京大学三学部）において「Hypnotism」に「催眠術」の訳語を当てている。催眠術がヨーロッパの最新の科学として輸入していた時期である一八九二年には、「催眠術」の単語を用いた図書・雑誌の出版が三〇八件である。そして、忌避と好奇のまなざしが向けられた明治三〇年代を経て、日本が日露戦争へ向かうのと並走するかのようになり、「催眠術」関連の書籍の出版も増えているのが確認できる。例えば、一九〇二年の出版状況は、「催眠術」の語を用いた図書・雑誌の出版が六三七件であるのに対して、日露戦争の前年である一九〇三年には三〇六八件が出版され、さらに、日露戦争が開戦した一九〇四年には八四七二件を記録するという大幅な変動がうかがえ、ここから人々の「催眠術」に対する興味・関心を確認することが出来る。（『NDL Ngram Viewer』 <https://lab.ndl.go.jp/ngramviewer/?keyword=%E5%82%AC%E7%9C%A0%E8%A1%93&size=100&from=0&materialtype=full> [二〇一四年三月三日閲覧]）

五 大沢謙二「催眠術と国家医学の關係」、『催眠術及スツケスチオン』、南江堂、一九〇四年、九二―九三頁

六 『鷗外全集』三卷、六一〇頁

七 渋江易軒『自己催眠術自在…原理応用』、大学館、一九〇九年、六頁

八 『鷗外全集』三卷、六〇九頁

九 同右、六一五頁

一〇 「それが好い。（問。）それから一つお前に注意して置かなければならない事がある。お母様をはじめ、どんな心安い人にも、今日の事を話すではありませんよ。」

「はい。」

「かういふ事が世間へ漏れると、どんな間違つた解釈をせられても、為様がありませんよ。こんな事はいつでも

当人から漏れる。磯貝は自分のインテレストがあるから、口外する筈がない。恐らくは大勢の女患者に同じやうな事をするのだらう。」

博士の顔には苦し気な微笑が閃く。そしてかう云つた。

「お前とおれさへ黙つてゐれば好いのだ。又お前とおれの間でも此事丈はこれつきり言ふまい。有つた事は無いやうに出来ない。（『鷗外全集』三卷、六一一頁）

一一 『鷗外全集』三卷、六〇二頁

一二 青柳精一『近代医療のあけぼの…幕末・明治の医事制度』、思文館出版、二〇一一年、三五四頁

一三 一柳廣孝『催眠術の日本近代』、青弓社、一九九七年、一一〇頁

一四 『鷗外全集』三卷、六〇一頁

一五 同右、六〇三頁

一六 同右、五九八頁

一七 同右、六一七頁

一八 吳秀三『催眠術の治療上の価値』、『催眠術及ズッケスチオン』、南江堂、一九〇四年、六〇頁

一九 『鷗外全集』三卷、六一六頁